



## 神田家に残された6枚の写真

寺島, 俊雄

---

**(Citation)**

神戸 街角の解剖学:89-93

**(Issue Date)**

2016-06-15

**(Resource Type)**

book part

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483154>



## 1. はじめに

神戸大学医学部の神緑会館内に「故<sup>もとの</sup>医学士神田知二郎君紀念之碑」という大きな石碑があるのをご存じだろうか。この石碑は、県立神戸医学校・薬学校の初代校長で県立神戸病院長を兼務した神田知二郎の早逝<sup>もりやす</sup>を悼み、明治25年、当時の神戸病院長の高橋盛寧他の発起により広厳寺（楠寺）に建立されたものである。その後、平成13年に石碑は竣工間もない神緑会館に移設された。その碑文を読むと明治22年に死んだ知二郎は故郷の京都府相楽郡白栖村（現和束町白栖）の先祖の墓所に埋葬されたとある<sup>1)</sup>。また知二郎の教え子の長澤亘による知二郎の追悼集に、白栖村で代々医業を営んでいた知二郎の実家に至る経路が断片的ながら記されている<sup>2)</sup>。この二つの記録をもとに、平成26年（2014）3月1日、私は和束町白栖を尋ねたところ、思いもかけず知二郎の墓を発見することができたことは報告したとおりである<sup>3)</sup>。この墓所の発見後に神田家当主と連絡がとれ、神田家が保存していた6枚の写真と神田家先祖代々の戒名一覧を確認するできた。またその後の調査により、知二郎が明治天皇の侍医高階<sup>たかしなつねのり</sup>経徳の二女信江と結婚していたことが明らかになった。

既に記憶が定かではないが、もう一度、知二郎の墓の発見直後に時計を戻してみよう。知二郎が埋葬されている共同墓所の掲示板から墓所の管理者は白栖地区の区長であることがわかった。そこで近くの毘沙門寺を訪れ、白栖区長の渡邊浩史様のご自宅を教えていただいた。既に午後4時を回り、山間の早い夕暮れが迫っていた。少し迷いながら谷筋に下りる道を歩いて区長さんの自宅を訪ねた。丁度車で出かけるころであったが、渡邊様は見ず知らずの私を

自宅に招き入れ、質問に丁寧に答えていただいた。区長さんの話を総合すると、墓碑に「医学士神田知二郎墓」とあることより高名な医学者という認識は地域の人々にはあったが、知二郎の生前の事跡については故郷ではすっかり忘れられていた。何といても知二郎が死んだのは明治22年（1889）であるから、すでに126年の歳月が過ぎている。

区長さんに「神田家の直系のご遺族を知りませんか?」と問うたところ、神田家の子孫は代々白栖で医業を営んでいたが、随分と前に医業を廃して奈良に引越されたという。幸い区長さんの奥さまが和束町に在住している神田家の縁者を知っておられて、すぐに電話して神田家当主の神田太郎様の住所と電話番号を調べてくださった。私は、その場で太郎様に電話したが、残念ながら留守であった。夕方6時半ごろだと思うが、すっかり暗くなった山間の道を区長さんの車でJR加茂駅まで送ってもらった。往路はJR加茂駅から雨中を歩いて2時間半余かかったのに、復路はわずかに20分位であった。知二郎の墓の発見とその子孫の連絡先を得たうれしさをかみしめて、JR加茂駅から関西本線経由で自宅近くの阪神青木駅まで帰った。

その数日後、奈良在住の神田家当主の太郎様と連絡がとれた。その際に神田家はいつごろまで白栖で医業を続けていたのか尋ねたところ、「新作の孫の敬作が昭和56年（1981）9月14日に白栖における医業を廃し、奈良に移転した」とのことであった<sup>4)</sup>。その神田敬作先生は昭和61年頃に死亡する。「何か知二郎の縁<sup>ゆかり</sup>の品を保存していませんか?」と問うたところ、写真と先祖代々の戒名一覧があるとのことであった。その他に成績証明つきの卒業証書、ベルツ博士の手紙、天皇陛下から下賜された桐箱入りのフ



図1 神田知二郎（左）と神田新作（右）（撮影者 市田左右太）

ロックコートがあったということだが、残念ながら散逸したという。そこで写真と戒名のメモを郵送していただくことにした。

後日、6枚の手札サイズの写真と「神田家先祖代々戒名」が郵送されてきた。写真は薄い印画紙ではなくて厚紙にプリントされている。便箋にペン書きの戒名一覧は表紙ページを含めて五枚であった。表紙ページを除いて、各ページに①～④の数字が付されている。

## 2. 神田新作・知二郎兄弟の写真（図1）

6枚の写真のうちの1枚は瞬時に知二郎と同定できた。神戸大学医学部50年史に掲載されている知二郎の写真と同じである。ただ額を横断するように斜めに折り目がついている。その優しい眼差しから知二郎の温和な性格がうかがわれるが、34歳の若さで早逝することを知っているせいか、何やら儚さを感じさせる写真である。裏には毛筆で医学士神田知二郎とある。

もう一枚の写真は、裏面に毛筆で神田新作とあるから、知二郎の兄の新作の写真である。父退蔵の急死により若くして医業を継ぐことになった長男の新作は、弟の知二郎が12歳のときに、その教育を京都の蘭学者で医師の廣瀬元恭に託す。元恭は父と同じ緒方洪庵の適塾で学んだ仲である。知二郎は元恭の子の元就もとなりが津の病院長に就任する際に、元就とともに津に赴く。向学心に燃える知二郎は、開学して間もない東校（東京大学医学部）で最先端のドイツ医学教育を学ぶことを望む。兄の新作は知二郎の願いをかなえるために、先祖伝来の山林や田畑を売って知二郎の教育費を捻出する。弟思いということもあるが、おそらく知二郎の頭脳が並はずれて優れていたことに気づいていたのだろう。知二郎は明治5年、19歳で東校に入学し、同13年7月、東京大学医学部本科を卒業して医学士となる。卒業後は、ただちに公立姫路病院長に着任し、明治15年3月に公立神戸病院附属医学所長に転じ、同4月に県立神戸医学校の校長に任命された。さらに県立神戸病院院長、県立神戸薬学校長を兼任した。

この知二郎と兄新作の写真の裏面には「大日本神戸港市

田製 S. Ichida Photographer Hiogo Japan」とあることより、撮影者は市田左右太いちだそうただろう。明治3年、市田左右太は神戸元町3丁目に市田写真館を開業する（後に2丁目に移転）。この市田写真館は元町6丁目の平村写真館と並んで神戸では有名な写真館で盛業であった。市田写真館は、のちに日本で最初のオフセット印刷を始めるなど、写真ばかりでなく日本における印刷史にもその名を残している。

## 3. 高階経徳・経本の写真（図2）

三枚目の写真と四枚目の写真の裏面にはやはり毛筆で侍医高階経徳殿、侍医高階経本殿と書いてある。写真の高階経徳は幕末から明治初期に活躍した漢方医で、孝明天皇や明治天皇の侍医を務めた。漢方医でありながら、西洋医学の重要性を説き、自ら率先してこれを学んだ。晩年は私塾「好寿院」を開いて医師育成に務める。日本の女医第1号の荻野吟子も経徳の門下生である（渡辺淳一著「花埋み」参照）。一方、高階経本は東大医学部で知二郎の一級上のクラスに在籍した。明治12年に卒業後、秋田県の公立大館病院長を経て、宮内省に出仕し、明治・大正天皇に侍医として仕えた。その後、大韓医院副院長を歴任した。高階家は代々侍医として朝廷に出仕する家柄であった。

この二枚の写真の裏面は同じデザインなので、同一の写真館で撮影されたものだろう。経本の写真の裏面のみに「日本橋通四丁目二見朝陽写」と赤いスタンプが押してあることより、（東京都）京橋区日本橋通四丁目写真店を開業していた二見朝陽によるものであろう。京橋区日本橋通四丁目は現在の中央区日本橋三丁目に相当する。郡区町村編制法で東京に京橋区が設定されるのは明治11年で、二見朝陽は明治13年に没するから、経本の写真は、明治11年～13年に撮影されたものに違いない。経本が東京大学医学部を卒業して医学士になるのは明治12年だから、卒業記念写真とすれば明治12年ではなかろうか。経徳の写真は経本のそれに比べてかなり損耗が進んでいるので、経本の写真よりかなり前に撮影された可能性がある。二見朝陽は湿板修正法の達人で、その門下からは丸木利陽など多くの写真家が育った。

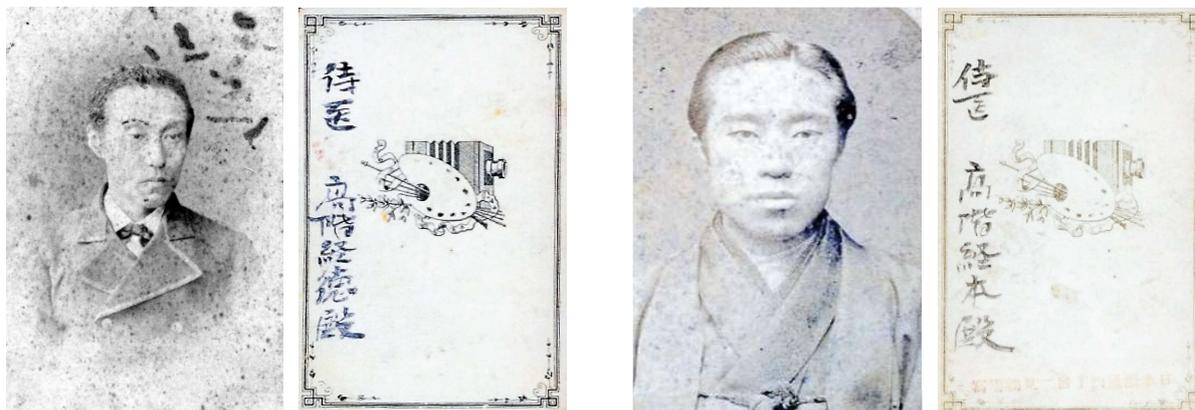


図2 高階経徳（左）と高階経本（右）（撮影者 二見朝陽）

ありす がわみやたけひとしんのう  
**4. 有栖川宮威仁親王と生母森則子の写真（図3）**

5枚目と6枚目の写真は有栖川宮威仁親王とその生母森則子の写真であり、それぞれの裏面に毛筆で有栖川宮威仁親王殿下御尊影、有栖川宮威仁親王殿下御生母御尊影とある。当時、一般庶民が皇族の写真を手に入れることは難しかったと思うので、この2枚の写真は、おそらく知二郎の一級上の高階経本から譲り受けたものに違いない。有栖川宮威仁親王は、文久2年1月13日（1862年2月11日）に有栖川宮熈仁親王の第4皇子として生まれ、大正2（1913年）年7月5日に没した（享年52歳）。明治11年に有栖川宮を継承する。海軍兵学校を卒業し、軍事参議官、元帥海軍大将を歴任したバリバリの軍人で、日清・日露戦争に従軍した。明治天皇名代として外国の式典などにも参列した。威仁親王の子の裁仁王<sup>たかひと</sup>が早世したため、有栖川宮家は断絶する。もう一枚の写真の森則子は有栖川宮熈仁親王の側室で、威仁親王の生母である。高階経徳は明治天皇の侍医であったが、有栖川宮熈仁親王の診察もしていたため、この2枚の宮家関連の写真が神田家にあるのだろう。

生母の森則子の写真の裏面には、東京赤坂 森山写と撮影者の名前がプリントされているが、森山とは写真師の森山浄夢であろうか。

**5. 神田家に遺された写真の謎（図4）**

神田家に先祖の新作・知二郎兄弟の写真が残されているのは不思議ではないが、高階経徳・経本の写真と皇族の写真が残されていたのには驚いた。丁度その頃、私は神緑会館の石碑の銘文の現代語訳を試みていたので、碑の銘文に「（知二郎は）高階氏に配すも子なく」という一文を知っていた（図4左）。つまり碑文によれば知二郎は高階氏の某女と結婚していたが子室に恵まれなかったのである。しかし早逝した知二郎に妻がいたことすらはっきりしない。ただ一つだけ知二郎に妻がいたことを匂わせる資料がある。知二郎の教え子の松永栄吉は、明治25年3月28日の知二郎の記念碑の建碑式に際して、廃校となった県立神戸医学校の生徒総代として祭文を謹呈したが、その

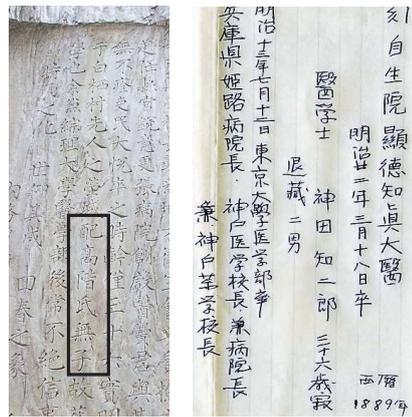


図4 神緑会館の石碑と戒名

中で「教えた内容を学生が理解的的確に回答すると、神田先生は欣喜雀躍してその喜びを令夫人（原文では「令閨」）や門弟に伝えるのである」とある<sup>2)</sup>。つまり知二郎には教育者としての喜びを分かち合える妻がいたようなのである。以上より知二郎は高階家の某女と結婚していたと半ば確信し、私はその姻戚関係を調べていた。そして調査に当たっては高階経本がカギとなる人物ではないかとにらんでいた。というのも開学間もない県立神戸医学校に着任した医学士（神田知二郎、杉田盛、神中正雄、佐野誉、鶴崎平三郎他）の卒業年度を明治初期の東大医学部の卒業者名簿で調べていた際に、知二郎より一年上のクラスに高階経本（本籍京都府）という名前があったことを覚えていた。なぜ東大医学部の卒業者名簿を調べていたかといえば、当時、医学校が甲種となるか乙種となるかは、医学士が3名いるかないかが基準であった。大学医学部は東大しかない頃であるから、医学士とは東大医学部卒業者と同義である。神戸医学校が甲種認定されたのは、たぶん神田、杉田そして外国の医学校卒業のハイデンの三名がいたからではないかと私は推測している。

東大で一級上の経本の同級生は20名、知二郎の同級生は17名しかいない。当然、学年を越えて学生間の交流は密であろう。しかも知二郎と経本は同じ京都府出身である。同郷の二人は将来の伴侶について語り合うこともあったろう。荒唐無稽<sup>こうとうむけい</sup>の誹りはあるが、経本の紹介で高階家の某女



図3 有栖川宮威仁親王（左）とその生母森則子（右）

と知二郎は結婚したのではないかと夢想した。今は余り聞かないが、昔は兄の紹介で妹が兄の友だちに結婚する類の話はたくさんあった。しかし高階家の家系を調べても神田家との接点は全く得られない。神田の同級生で後に東大医学部の解剖学教授となる小金井良精の日記や、東大医学部教授で経本や知二郎を教えたベルツの日記なども読んだが、そこには知二郎や経本に関する言及は一切出てこない。

知二郎と高階家の婚姻関係の証明を半ばあきらめていた矢先に、今回、神田家に高階経徳・経本の写真が残されていたことを知ったときは、私の推測が正しさを示すものでかなり気分が高揚した。有栖川宮威仁親王とその生母の写真が神田家にあるのも、有栖川宮家の人々を診療した高階経徳の面目を示すものであり、両家の間で結婚を前提に写真がやりとりされたことをうかがわせる。

しかし私の高揚した気分は同時に郵送された「神田家先祖代々戒名」を見て、急速にしぼんでしまった（図4右）。知二郎の戒名の欄には以下の記載がある<sup>5)</sup>。

自生院顕徳知眞大医  
明治廿二年（西暦 1889 年）三月十八日卒  
医学士 神田知二郎 三十六歳寂  
退蔵二男  
明治十三年七月十二日 東京大学医学部卒  
兵庫県姫路病院長 神戸医学学校長  
兼病院長 兼神戸薬学校長

知二郎の父の退蔵、兄の新作、新作長男の震吉の戒名には全て妻の戒名と俗名が次欄に添えられていたが、知二郎の戒名の隣には伴侶の記載がない。神田家先祖代々戒名の知二郎の欄に婚姻関係を示す記載はないことを知って、私はがっかりしてしまった。

神緑会館の石碑に「高階氏に配す」とあり、東京大学医学部の1年先輩に高階経本が在籍していること、そして高階経徳・経本の写真、高階家と関係が深い有栖川宮威仁親王とその生母の写真が神田家に保存されていることは、知二郎と高階某女との婚姻関係を示唆するものであるが、戒名からは両者の婚姻関係を示す記載はなかった。お借りした6枚の写真と神田家先祖代々戒名は神田太郎様に書留にて返送した。

## 6. その後の展開

結局、神田家に遺されていた資料からは、知二郎と高階家との姻戚関係を明確に証明することはできなかった。がっかりしたが、それでもしつこく侍医の高階経徳・経本について調べていた。ある日、ネット上で興味深い記事を見つけた。昭和62年11月、東京の染井霊園に埋葬されている高階経徳・経本他の十基の墓を改葬して「高階家之墓」の一つにまとめたという記事である。墓を改葬した人は高階経和とある。そこで「高階経和」をキーワードにしてグーグル検索すると、必ず心電図や聴診のテキストの著

者の高階経和氏がヒットする。高階家の男子は全て名前に「経」がつくことより、この心臓内科医の高階経和氏は高階経徳・経本の後裔ではないだろうか。しかもこの方は神戸医大を昭和29年に卒業された方である。染井霊園の高階経徳他の墓を改葬した「高階経和」と神戸医大昭和29年卒業の「高階経和」は同一人物かもしれないという疑問が湧いた。そこで高階先生と神戸医大で卒業年度が近い山鳥名誉教授（第1解剖教授、昭和32年神戸医大卒）に高階経和先生をご存知か問い合わせた所、同じESS部（英語研究会）に所属し、家も近くで今でもお付き合いがあるとのことであった。高階先生と面識のない私が、高階先生の先祖が高階経徳・経本であるか直に問い合わせるのは余りに不躰<sup>ぶしつけ</sup>に思えたので、山鳥先生に「高階先生は天皇の侍医に繋がる家系ですか？」と婉曲に質問をしていただくことにした。そしてその回答はイエスであった。高階先生は、戦後の変革期を通じて、自身の先祖について一切、他言しないと決めていたという。私は、山鳥先生に高階先生を紹介していただき、その後、先生に電話をしたり、直接お会いして、先生ご自身の経歴や高階家のことについて詳しくお話を伺うことができた。

高階先生は昭和29年に神戸医大を卒業し、大阪府堺市の第382米国陸軍病院でインターンを経験し、その後、渡米してチューレーン大学医学部内科に留学し、パーチ教授の下で心臓内科学を研鑽した<sup>6)</sup>。帰朝後は、淀川キリスト病院で循環器科医長として勤務する一方、母校で金子敏輔先生から医学英語の講義を引き継がれた。現在も大阪で高階国際クリニックを営み、臨床心臓病学教育研究会の理事長を務めている。心電図のテキストの他にも心臓聴診のシュミレーター「イチロー」の開発や聴診器の開発で有名である。高階先生は医療の現場で働きながら医学教育にも熱心で、しかもその活動がワールドワイドのスーパー心臓内科医である。

高階経和先生のお話を総合すると、孝明・明治天皇の侍医を務めた経徳には男の子が二人いたが、いずれも三歳で夭折する。そこで山岸良吉（後に高階経温と改名）を養子に迎え、これに長女の篤を配して分家とした。経温と篤の間の子が経本で、さらにその子が経世である。そして経世の子が経昭と経和で、経昭が分家を、経和が本家の家督を継ぐ。少しややこしいが本家と分家の間で養子縁組をして、一族を繋いでいくことは戦前では当たり前のことである。参考までに神田家と高階家の家系図を作成してみた（図5）。

ともかく高階経和先生が高階経徳・経本の後裔であることがはっきりしたので、高階家の家系図などがあれば知二郎と高階家との婚姻関係について調べてもらえないかと高階先生に依頼した。最初の回答は「姻戚関係なし」で、私は再度がっかりしたが、その後、高階経徳の二女の信江が知二郎に嫁したという記録が出てきたという連絡を得た。やはり知二郎は高階家と姻戚関係があった。私の推測

